

研究主題 「学んだことの価値を実感させる指導の工夫

ー総合的な学習の時間を中核としたカリキュラムモデルの開発を通してー」

東京都教職員研修センター 企画部 企画課
昭島市立つつじが丘南小学校 主幹教諭 下野 剛

第1 研究のねらい

PIACC2013（国際成人力調査）の分析から、日本人は、高い読解力、数的思考力をもつ反面、他国と比べ、それらの能力の仕事での活用頻度は平均以下であるという結果が出た。義務教育から高等教育にかけて学んだ学力が実社会において十分に発揮されていないことを示している。

平成27年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の結果によると、国語科、算数科の学習が、「大切だと思う」、「将来、役に立つと思う」という問いに対する肯定的な回答の割合が、いずれも約90%と高い。しかし、学んだことの実際の活用に関する項目での肯定的な回答は、約60～75%程度になっている。これらのことから、児童は学習が役に立つであろうと思っているが、どのように役立てることができるかについては、具体的に捉えられていないと言える。

この児童の実態の解決には、活用の具体的な見通しをもって習得する学習や、児童自身が必要性を感じる課題解決の過程において、習得したことを活用する経験を通して、習得したことは「活用できる」「役に立つ」といった学んだことの価値を実感することが必要である。

そこで研究主題を「学んだことの価値を実感させる指導の工夫」とし、総合的な学習の時間での実社会や実生活に関わる探究活動を通して、教科で学んだことの総合的な学習の時間での活用を意識したり、実際に活用して実社会に関わる問題解決に取り組んだりするような教科横断的な学習を展開することで、学びの相互作用が生まれるのではないかと考えた。

本研究においては、総合的な学習の時間と各教科等を横断的に接続するための手法や、教科等と関連付けた学習の評価について、カリキュラムモデルの開発を通して、具体的に明らかにしていくことをねらいとした。

第2 研究仮説

総合的な学習の時間をカリキュラムの中核として位置付け、教科で学んだことの活用を意識したり、実際に活用して実社会に関わる問題解決に取り組んだりするような教科横断的な学習を展開することで、児童は学んだことの価値を実感することができるであろう。

第3 研究の内容及び方法

1 基礎研究

新潟県上越市立大手町小学校（平成24年度～平成26年度文部科学大臣指定研究開発校 研究主題「真の自立」と「共生」を目指す教育課程の創造）の先行研究の分析を行った。

総合的な学習の時間を中核として、資質・能力の視点から各教科等を再編した研究は、本研究のねらいと共通する部分が多い。これまでの実践においても、総合的な学習の時間の活動に関連する各教科の学習を意図的に接続することで習得と活用が一体となり、効果的に展開されている。本研究においては、大手町小学校のコンピテンシーベースでの各教科等の学習を捉え直す視点（「何を知っているか」ではなく、「何ができるか」）を参考とし、現行の教科等の枠組みの中で、各教科等で身に付ける知識や技能、資質・能力と総合的な学習の時間で育成すべき資質・能力との関係を明確にし、横断的な学習カリキュラムの実現を目指すこととした。

2 調査研究

所属校の第5学年児童(31名)を対象に意識調査を行った結果、国語科、社会科、算数科、理科の学習が「役に立つと思うか」という問いに、いずれも80~90%の肯定的な意見をもっていることが分かった。しかし、学んだことの活用場面や活用方法について具体的に記述できた児童は、4教科平均で16%だった。このことから児童は教科等で学んだ知識や技能、見方や考え方などの活用方法について、具体的に捉えられていないことが分かった。

3 開発研究

(1) 総合的な学習の時間を中核としたカリキュラムモデルの開発

① カリキュラムの中核とする総合的な学習の時間の単元開発

身近な地域の学習対象、学習事項を設定する。実社会や実生活と関わる身近な課題に取り組むことで児童にとって学習が自分自身の事となり、必要性を感じる学習となる。また、学習が地域の社会参画に発展することで、多様な知識・技能を活用しなければ解決できない課題となり、学んだことの活用を促すことにつながる。単元実施の期間や時数は、探究の過程が繰り返され、スパイラルに高まるよう長期的に展開できるようにする。

② 総合的な学習の時間の活動計画と接続可能な教科の学習内容の選び出し

本来、汎用的な資質・能力を視点に行うべきだと考えるが、現行の学習指導要領では、明確に示されていないため、次のような方法で行うこととした。

ア 国語科、算数科

国語科は各学年の指導事項(「相手に応じて話す」など)、算数科は各学年の領域で身に付ける知識・技能(「割合の求め方」など)と、総合的な学習の時間で育てようとする資質・能力(「必要な情報を収集し、分析する」など)と関連するものを選び出す。

イ 社会科、理科

総合的な学習の時間の学習対象(「昭島の水に関わる人々」など)と、社会科、理科の学習内容(「森林のはたらき」や「流れる水のはたらき」など)と関連する単元を選び出す。

③ 横断的カリキュラムの作成

選んだ単元を、活用を見通した習得や習得したことの活用が生まれるように接続する。

④ 学んだことの活用に関する評価

教科の学習内容と、総合的な学習の時間で身に付けるべき資質・能力を合わせ、学んだことを活用している児童の姿を示したルーブリックを作成し、パフォーマンス評価を行う。

各教科の学習内容		総合的な学習の時間で身に付けるべき資質・能力
A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
教科で学んだことを効果的に活用して探究活動に取り組んでいる。	教科で学んだことを活用して探究活動に取り組んでいる。	自分なりに探究活動に取り組んでいる。
(国語科 第5学年「A話すこと、聞くこと」 聞くことの活用に関するルールブック例)		
A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
自他の意見を比較・検討し、より効果的なものを取り入れながら課題の解決に向けて準備を進めている。	他者の意見を聞き、必要に応じて取り入れながら課題の解決に向けて準備を進めている。	自分なりに課題の解決に向けて準備を進めている。

4 検証授業

(1) 総合的な学習の時間（カリキュラムの中核となる単元）

昭島市は、都内唯一 100%深層地下水を水道水としており、その背景には市を挙げての環境保全への強い思いや様々な取組がある。本単元では、それらに直接関わりながら、身近な人やものよさに気づき、主体的に町づくりに参画する態度の育成を目指すこととした。

ア 単元のねらい

昭島の水について考え、そのよさを理解したり、広めたりする活動を通して、都内唯一の天然地下水を守り続けている人々の思いを知り、自分たちの市を支える人への感謝や社会参画の気持ちをもてるようにする。

イ 学習の流れ

- ① 昭島の水についての児童の疑問（なぜペットボトル水になっているのだろうか。）から探究を進め、市の水道課や環境課の方々と直接関わりながら学習する。
- ② ①で探究した昭島の水のよさについてまとめ、それらがどの程度、市民に知られているのかを調査・分析し、もっと知らせるべきであるという課題を設定する。
- ③ 自分たちの思いから、『水のよさを昭島中の人へ知らせよう』というゴールイメージを設定し、その達成に向け、HP、ポスター、チラシ、お便りなどの広報活動に取り組む。

(2) 各教科との接続

各教科から接続可能な学習を選び出した後、中核とする総合的な学習の時間において、活用できるかどうかという視点から接続する場所を決め、横断的な学習カリキュラムを作成した。実際には表の全ての単元との接続を計画して指導を展開してきたが、手だての効果については、小单元ごとに教科と総合的な学習の時間との接続による効果の検証を行った。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
総合的な学習の時間	昭島の水、再発見プロジェクト（45時間）									
	小单元① 昭島の水の秘密を知ろう なぜペットボトルに？ 情報収集（水道課・環境課） 見学（昭島市民の森・奥多摩町）			小单元② 昭島の水のよさは知られているのか 意識調査 グラフ アンケート			小单元③ 昭島の水のよさや価値をもっと市民に広げよう ポスター ちらし CM HP			
国語科	インタビュー	敬語	報告文	資料を根拠に 意見を書く		検証③ 提案書作り		説明文		
社会科				検証① 森林のはたらき		情報産業 情報活用		環境を守る		
算数科				単位量あたりの大きさ		検証② 百分率 グラフ				
理科	植物の 発芽と成長		花から実へ			流れる水のはたらき				

（黒線で結んだ部分が検証を行った単元）

ア 社会科との接続の効果

昭島市の水が、なぜペットボトルで配布されているのかという児童の疑問や興味・関心から始まった総合的な学習の時間の活動と、森林の学習を接続したため、社会科の知識・理解や資料活用に主体的に取り組むことができた。その後の総合的な学習の時間での地域のよさをPRする活動では、約40%の児童が森林の大切さを市民に伝える取組を行った。

イ 算数科との接続の効果

教科書の練習問題などでは割合の意味を理解できず、苦手意識をもっていた児童が、総合的な学習の時間の活動で行ったアンケートの結果を使って、百分率や円グラフを学習したことで、百分率の概念や、グラフの有効性を具体的に捉えることができた。また、その後の総合的な学習の時間でのHPやポスター、学校便りを作成する活動で、自ら進んで百分率やグラフを活用する児童が69%見られた。

ウ 国語科との接続の効果

これまでの学習において、考えを文章で表現することに苦手意識をもっていた児童が、総合的な学習の時間で実際に取り組んでいる課題をテーマにすることで、提案書の目的が明確になり、具体的な視点をもって話し合ったり、提案書を書いたりすることができた。

(3) 検証結果の分析

教科で学んだことの実社会や他教科での活用について、検証授業前には具体的に記述できなかった児童の多くが、検証授業後には記述できるようになっていた。これは、教科の接続が機能し、教科で学んだ内容が、総合的な学習の時間を通して、必要と感じたり、実際に活用できたりしたことの効果であると考えられる。

【学んだことの実社会や他教科での活用について、具体的に記述できた児童の割合】

	検証授業前	検証授業後
社会科で学んだことの活用	10%	43%
算数科で学んだことの活用	20%	100%
国語科で学んだことの活用	18%	81%

第4 研究の成果

接続した学習を終えた後、学んだことが活用できるようになったかを、総合的な学習の時間におけるパフォーマンス評価で検証した。その結果、90%以上の児童が、接続した教科で学んだことを実際に活用しながら総合的な学習の時間の課題解決に取り組んでいた。活用を具体的に捉えられたことで、実際に活用できるようになったと考える。

	A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
社会科の活用	56%	34%	10%
算数科の活用	69%	28%	3%
国語科の活用	31%	69%	0%

第5 今後の課題

総合的な学習の時間が充実しなければ、接続の効果も高まらない。各学校、各学年において、カリキュラム全体を見通した探究的な学習が成立するような単元開発が必要となる。